

上代の接頭語「い」

白井清子

要旨

上代の、動詞に冠する接頭語「い」は、主に次の二つの用法がある。

第一は、「い行き至る」「い漕ぎ渡る」「い行きもとほる」などのように、空間的に遠くへ移動する動作、空間的な長さに及ぶ動作のさまを形容、強調する。

第二は、「い継ぐ」「い副々ひ居り」「い積もる」「い立ち嘆かふ」などのように、時間的に継続する動作、時間的な長さを含む動作のさまを形容、強調する。

動詞に冠するということも合わせ考えると、「い」は現代語の副詞スットに類する語ではないかと考える。第一の用法が第二の用法にまで拡大したものであろう。

一、はじめに

上代を中心に、次のような接頭語（注一）「い」があったことが知られている。

海原の 畏き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて〔伊呂勢和多利呂〕 あり廻り△万葉集四四〇八▽

天地の 初めの時ゆ 天の河 い向ひ居りて〔射回居而〕△万葉集二〇八九▽

これらのイについては接頭語とだけ記す注釈書も多く、例はあがっていてもその用法を説明したものはほとんどない。比較的詳しいものでも次のようなものがある程度である。

動詞に付き、語勢を強め、或は語調を整へる。△佐佐木信綱著『萬葉集事典』▽

古くは明らかな意味があつたのであろうが、奈良時代では不明。△高木市之助・五味智英・大野晋校注 日本古典文学大系『萬葉集』四三五番頭注▽

「い」は奈良時代あるいはそれ以前に多く見られる接頭語。動詞について、その意味をつよめる。△小西甚一校注 日本古典文学大系『古代歌謡集』琴歌譜 三番頭注▽

動詞の前に付けて強調や語調を整えるのに用いる。詳細な意味は未詳。△『日本語文法大辞典』山口明穂執筆▽

各種辞典類も同程度で、結局、上代の文献ではよくわからない、ということである。

しかし、このイは上代に一〇〇以上の用例があるわけで、丁寧に見ていけば、何かもう少し探れるのではないかと思つて調べてみた。その結果をここに記したい。

二、イを含む句へ、その中の動詞

調査にあたつては以下のとおりに処理した。

○古事記、日本書紀の重複歌も別個に挙げる。

○万葉集に関しては(1)日本古典文学大系『万葉集』(岩波書店)と(2)新編日本古典文学全集『万葉集』(小学館)の両書で、イを含む動詞が同一の訓みであるもののみをとりあげた。例えば、四一七八番の歌は第五句が(1)では「い行き鳴かなも」、(2)では「い行き鳴かにも」となっているが、「い行き鳴か」の部分と同じなので、例に含めた。一五二八番の、(1)では「いかよふほとに」、(2)では「い行き返るに」となっている例、一八〇九番の、(1)では「い行き集ひ」、(2)では「い行き集まり」となっている例は除いた。(注2)

○複合句詞の「い組竹」「い行き会ひ(の坂)」「い杵築(の宮)」はイに動詞が下接して「い組む」「い行き会ふ」「いきづく」となったものに名詞になったものと考えられるが、今回は除いた。(注3)

幾つかこの報告から除いたものもあるが、それは、単に報告が煩雑になることを避けるためであつて、仮にそれらを加えても結論は変わらない。

管見に入つたイの用例はいずれも歌でその内訳は次のとおりである。(古事記五九番の「い及けい及け」、万葉集二二四五番の「声い継ぎい継ぎ」はそれぞれ一つの句だが各二例に数える)

	古事記	日本書紀	万葉集	琴歌譜	合計
例数	一七	一四	七一	一	一〇三
句数	一六	一四	七〇	一	一〇一

この一〇三例を句の形で全例示す。aとdは以下の用法による分類である。詳しくは後述する。本文、及び句の分け方は日本古典文学大系『古代歌謡集』『萬葉集』によつた(ただし、用字を一部変えた場合がある)。用例の下の数字は歌謡番号である。

a 空間的に遠くへ移動する動作、空間的な長さ及び動作に関わるもの

- b 時間的に継続する動作、時間的な長さを含む動作に関わるもの
 c aとbの両方の意味があり、どちらにとっても限定できないもの
 d 疑問として残るもの

古事記 一七例 一六句

b	い這ひ廻 <small>もほり</small>	△二三	a	い及しけ鳥山	△五九
b	い行き目守 <small>もらひ</small>	△一四	a	い及しけい及け	△五九
a	い行き違 <small>ちがひ</small>	△二二	a	いしき会はむかも	△五九
a	い行き違ひ	△二二	a	い帰り来むぞ	△八六
b	い副 <small>へ</small> ひをるかも	△四二	c	い組みは寝ず	△九一
d	い伐らむと	△五一	b	い隠る岡を	△九九
d	い取らむと	△五一	b	い寄り立たし	△一〇四
d	い伐らずそ来る	△五一	b	い寄り立たす	△一〇四

日本書紀 一四例 一四句

a	い渡らす泊門 <small>とまり</small>	△三	d	い伐らずそ来る	△四三
b	い這ひ廻 <small>もほり</small>	△八	a	い及しけ鳥山	△五一
b	い這ひ廻り	△八	a	い及しけ及け	△五一
b	い行き目守 <small>もらひ</small>	△一二	a	いしき会はむかも	△五一
a	い渡らすも	△二四	a	い帰り来むぞ	△七〇
d	い伐らむと	△四三	a	い及しかずあらまし	△八一
d	い取らむと	△四三	c	い行き憚る	△二八

万葉集 七十一例 七〇句

b	い寄り立たしし	△三
b	い立たせりけむ	△九
d	い隠るまで	△一七
b	い積もるまでに	△一七
a	い行き至りて	△七九
a	い巻き渡ると	△一九九
a	い吹き惑はし	△一九九
b	い匍ひ伏しつ	△一九九
b	い匍ひもどほり	△一九九
a	朝立ちい行きて	△二二三
b	い匍ひ掻きめ	△二三九
b	い匍ひ廻もほれ	△二三九
b	い匍ひ掻きみ	△二三九
b	い匍ひ廻もほり	△二三九
c	い行きはばかり	△三二七
c	い行きはばかり	△三二七
c	い行きはばかり	△三二九
c	い行きはばかり	△三二九
b	い触れけむ	△四三五
a	い行きさぐくみ	△五〇九
a	い行き廻もほり	△五〇九
a	い辿りよりて	△八〇四
b	い取らして	△八二三
b	い開きめぐる	△九三二
a	い行きさくみ	△九七一
a	い往き還らひ	△一七七
c	い掘じて植ゑし	△一四三
a	い別れ行かば	△一四三
a	い掻き渡り	△一五二
a	い漕ぎ渡り	△一五二
c	い漕ぎ向ひ	△一七四
a	い渡らず児は	△一七四
a	い行きめぐる	△一七五
c	いつがりをれば	△一七六
b	い立ち嘆かひ	△一八〇
a	君はい行かじ	△一九一
b	い向ひ立ちて	△二〇一
a	い渡らさむに	△二〇一
b	い向ひ居りて	△二〇八
b	声い継ぎい継ぎ	△二〇八
a	い行く狽夫きそは	△二四七
a	い行き触れぬか	△二四七
a	明かしてい行け	△二六八
c	い行きははかる	△二六八
a	い行きなば	△三〇九

a	いそはひをるよ	△三三三九△	c	いつがり合ひて	△四一〇六△
a	い取り来て	△三三四五△	b	い尽くす極み	△四一二二△
a	い刈り持ち来	△三三三三△	b	い泊 ^い つるまでに	△四一二二△
a	い刈り持ち来て	△三三三三△	a	い行き渡らし	△四一二五△
b	天雲 ^{あまぐも} い継ぎ	△三四〇九△	a	い渡りさむを	△四一二六△
a	い懸かる雲の	△三五一八△	a	い行き鳴かなも	△四一七八△
a	手児 ^{てこ} にい行き逢ひ	△三五四〇△	a	い漕ぎめくれは	△四一八七△
a	い拾 ^{ひろ} ひ持ち来て	△三八八〇△	a	い布 ^ぬ き折り	△四二〇五△
a	物にい行くとは	△三八八五△	a	い漕ぎつつ	△四二五四△
a	い行き乗り立ち	△三九七八△	b	い群れてをれば	△四二八四△
a	い行きめぐる	△三九八五△	a	い行きさぐくみ	△四三三一△
a	い渡りて	△四一〇一△	a	い廻 ^{まわ} むるごとに	△四四〇八△
a	い行き渡りて	△四一〇三△	a	い漕ぎ渡りて	△四四〇八△

琴歌譜 一例 一句
a い堀^{ほり}じ持ち来て

△二△

これら一〇三例をみると、イが多く「行く」に付いているなど、何か特徴がありそうである。そこでイの冠した動詞（「い漕ぎ渡る」のような複合動詞の場合は前項「漕ぐ」のみ）を整理してみると次のようになった。下の数字は例数。

第一表

行く二八 及く八 這ふ九 渡る六 漕ぐ五 伐る四 取る四 立つ三 継ぐ三 倚る三
（このほかに二例のもの六語、一例のもの一八語） 延べ計一〇三語

「行く」「しく(追いつく意)」「這ふ」「渡る」「漕ぐ」など、移動を表す動詞が多い。しかし、同時に、「取る」「立つ」「倚る」など、それ以外の動詞もある。

さらにこれを複合動詞の後項も含めたすべての動詞成分に分けて調べてみると以下ようになった。

第二表

行く三〇 渡る二二 及ぶ九 這ふ九 来七 立つ七 もとほる七 漕ぐ五 ははかる五 あふ(合・逢)四
伐る四 取る四 めぐる四 持つ四 倚る四 居る四 帰る三 漕ぐ三 向かふ三

(このほかに二例のもの九語 一例のもの二五語 延べ計一七〇語)

第二表には複合動詞の後項成分に多く現れるもの、「来」、「もとほる」、「ははかる」、「あふ」、「をり」などがある。第三表でも移動を表す類が目立つがそれ以外のものも多い。動詞だけを見てもこれ以上はつかめそうにない。そこでイの例が出てくる歌全体からイを含む句について考える必要が出てくる。

三、動詞が空間的移動、長さを含むこと

前記のことをふまえ、遠い距離まで移動する意、空間的に延びる意がイの冠する動詞にあるのではないかと見当をつけて歌を調べてみると、果してそのような句が多い。例を示そう。(以下、古事記・日本書紀・万葉集を「記」「書紀」「万」として、その下に歌謡番号を記す)

① 大君を 島に放らば 船余り い帰り来むぞ (伊賀磐理許牟紀) ……我が妻はゆめへ記八六▽

この歌は允恭天皇崩御後、継承争いに破れた軽太子が四国に流されたときの歌とされる。「大君である自分(軽太子)を四国に追放しても、帰ってくるに違いないから、我が妻よ、潔斎して待っていないさい」という意味である。「い帰り来」はここでは四国から大和へ帰ってくることをさしている。仮にこの歌が、軽太子に関係なく作られた歌であったとしても、遠い所から帰ってくるという意味に変わりはない。

② 難波瀉 三津の崎より 大船に 真槿繁し貫き 白波の 高き荒海を 島伝ひ い別れ行かば (伊別往者 留ま

れる われは幣引き 斎はひつつ 君をば待たむ はや還りませ 八万二四五三)

これは、笠金村が入唐使に贈った歌である。「い別れ行く」は難波から別れて唐に向かって行くことをさしている。

③ 海原の 畏き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて (伊口藝和多利三) あり廻り わが来るまでに八万四四〇八)

これは、防人として出かけていく人の気持ちを家持が歌ったもので、遠い地まで船で出かけて行って、任務を終えてめぐりめぐってここに私が戻ってくるまで皆元気でいてくださいという歌で、「い漕ぎ渡る」は防人として遠くまで船で行くことをさす。

④ 牽牛いじしは 織女おほほろと……川に向き立ち 思ふそら 安からなく……さ丹塗りの 小舟もがも 玉纏の 真

櫂もがも……朝風あさかぜに い掻き渡り (伊可伎渡) 夕潮に……い漕ぎ渡り (伊許藝渡) 八万二五二〇)

「天の川を舟の櫂を掻いて渡る、舟を漕いで渡る」で、牽牛と織女にとって天の川は二人を遠く隔てているものである。「い掻き渡る」のイが「掻き」だけにかかるのではなく「掻き渡る」にかかるを考える。

⑤ 階は立つ 筑摩つくま 左野方さのあた 息長おきながの 遠智とちの 小言こご 編まなくに い刈り持ち来 (伊刈持来) 敷かなく

に い刈り持ち来て (伊刈持来而) 置きて われを俵はす 息長の 遠智の 小言 八万三三三三)

「小言を編みもしないのに、敷きもしないのに、刈って持ってくる。」この歌では、前の四例ほど、具体的な距離がわかるわけではない。しかし、頼みもしないのにわざわざ持ってきたとしており、心理的にはある程度の距離を感じさせる。イが「刈り」だけでなく「刈り持ち来」全体にかかると考えれば、遠い距離にイが関わることになる。

これら五つの例はそのいずれもが、遠い所へ移動することとして「い帰る来」「い別れ行く」「い漕ぎ渡る」「い掻き渡る」「い刈り持ち来」などと言っている。④のような、複合動詞全体にイがかかるという場合があることを認め

るならば、イが遠い所、長い距離に関わると考えられる例は他にも非常に多い。これらの類をaとしておく。

四、時間的継続を含む動詞があること

ところが、さきにaとした、遠い所へ移動する意味とはまったく異なる動詞にイがついた例がある。

⑥ 秋萩の恋も尽きねばさ男鹿の声い継ぎい継ぎ (声伊統伊統 恋こそ益され八万二四四五)

「秋萩に対する恋心もまだ尽きていないのに、さ男鹿の雌鹿を呼ぶ声が何度も続いて、妻に対する恋憎がますます強くなっていくけれど……。」さ男鹿の長く続く鳴き声が何度も聞こえる。「継ぐ」には時間的に継続する意味がある。そう思ってみると、次のような歌も時間的な継続といえそうである。

⑦ 天地の 初めの時ゆ 天の河 い向ひ居りて (射回居而) 一年に 二度逢はぬ 妻恋に 物思ふ人八万二〇八九
天地の始まりのときから長い間天の川に向きあい続けている彦星である。「向居り」ですつと継続していることがわかる。

⑧ 茜さす 日のことごと 鹿じじもの い匍ひ伏しつ (伊波比伏萱) ぬばたまの タベになれば、 大殿を ふり

放け見つつ 轉々す なす い匍ひもとほり (伊波比廻) 侍へど 侍ひ得ねば八万一九九

これは高市皇子の亡くなった時の人麿の挽歌で、「昼は日の暮れるまで、鹿のように匍ひ伏し続け、夕方になると鶴のように匍ひ回ってお仕えしてもその甲斐がないので」と歌っている。「い匍ひ伏しつ」と助詞ツツが付いているから、この動作は何度も反復、継続して行われている。「い匍ひもとほり」はモトホルとぐるぐると回る動作が含まれており、空間的な距離も感じられるが、ここでは、回り続けている時間的な意味が強いと解釈しておく。

「い匍ひもとほり」という句はほかにもある。

⑨ 神風の 伊勢の海の 大石^{おおいし}に 這ひ廻^{もほ}ろふ 細螺^{こぞ}の い這ひ廻り〔伊波比母等重理〕 撃ちてしま

むハ記二三

この歌は日本書紀では次のようになっている。

⑩ 神風の 伊勢の海の 大石^{おおいし}にや い這ひ廻^{もほ}る〔異波比母等倍重〕 細螺の 吾子^{みこ}よ 吾子^{みこ}よ

細螺の い這ひ廻り〔異波比母等倍重〕 撃ちてしまむ 撃ちてしまむハ書紀八

古事記で「這ひもとほろふ」とハヒモトホルに反復・継続のフがついた形の句が、日本書紀では「い這ひもとほる」と

接頭語イがついてフのない形になっている。⑨と⑩がほぼ同じ意味の歌とするならば、イはフと類似の意味を持つとも

考えられる。これはイが継続を含む表現と関わりがあると考える傍証となろう。

そのイとフが共に現れる句もある。反復・継続がより明確に表現されている。

⑪ この道を 行く人^{ひと}ことに 行き寄りて い立ち嘆かひ〔射立嘆目〕 ある人は 哭^なにも泣きつつ 語り継ぎハ万

一八〇一

「芦屋処女の墓を過ぐる時に作る歌」と題詞にある。「芦屋処女の墓の傍に寄って行って、そこに立って処女の悲しい身の上に何度も嘆息して」という意味になる。「立ち」もここでは実際に立ち続ける意を含んでいるが、このイは「立ち嘆かひ」全体に冠していると考えた方がよからう。

⑫ やすみしし 我が大君の 朝間^{あさま}には い寄り立たし〔伊余理陀多志〕 夕間^{ゆま}には い寄り立たす〔伊余理

陀多須〕 脇^{わき}に 板^{いた}にもが あせをハ記一〇四

これは、「朝夕に脇に寄り立たれる、その脇の下板になりたい」の意である。この場合、寄り立つ動作は瞬間的なものではなく、ある時間継続して寄り立たれる、だからこそその脇の板になりたいと思うのである。したがって、こういう例も、時間的に継続する意が含まれていると考えてよいであらう。

以上の歌はいずれも、長い時間にわたって行われる動作の「継ぐ」「向ひ居り」「匍ひ伏す」「匍ひもとほる」「立

ち嘆かふ」「寄り立たす」にイが付いている。これらの類をbとする。

五、空間的移動と時間的継続

空間的に遠くへ移動する意味、空間的長さが動詞に含まれるものをaとし、時間的に継続する意味、時間的長さが動詞に含まれるものをbとした。一般に、空間的な意味から時間的な意味に拡大することはいくつもある。例として名詞「さき(崎・先)」「や動詞「わたる(渡)」「・「過ぐ」をあげることができる。接頭語のイもaの用法が拡大してbになったと考えれば、aとbの用法はつながる。

このように見ていくと、一〇一句あるうちの大部分の句がaからbに含まれるが、中にはaともbとも判断できない例があるのでこれをcとする。二例だけ示す。

⑬ 豊国の香春はるは吾家は紐児はに「つがりをれば」伊都我里座者「香春は吾家へ万一七六七」

「豊後国の香春に住む娘子である紐児と結婚して住み続けているので、香春は自分にとってわが家である」という意。ツガルはくさりのように繋がる意を表す。住み続けていることを重視すれば、時間的継続になるが、ツガルが空間的意味を有していてそれが結婚という抽象的意味になったとも考えられ、aやbにまとめきれない例である。

⑭ 不尽の高嶺は 天雲も 行きはばかり「伊去波伐加利」 飛ぶ鳥も 飛びも上らずへ万三一九」

「行く」には空間を進む意があるが、「はばかり」の敬遠する意には時間的長さがあるので、aでもありbでもある。

六、疑問例の解釈

空間的な長さを含むaの類、時間的な長さを含むbの類、そのどちらとも限定できないcの類があることを示してきたが、aとcのどれにもはいらないのではないかと思われる疑問例が実は一四例残っている。これらをaとcの考え方

で解決できるかどうか一つ一つ見ていきたい。

⑮ 御真木人日子みまきひとひこ はや 御真木人日子はや 己おのが命いのちを 盗み死せむと 後のちつ戸よ い行き違ひ (伊由岐多賀比) 前まへつ戸よ い行き違ひ (伊由岐多賀比) 窺うかがはく 知らにと 御真木人日子はや 入記二二

底本頭注には、自分を殺そうとして「皇居に立ち働く者の目を避けて、裏口から表口へ廻ったりして、進入する機会をねら」っている者がいるのも知らないで、とある。「後つ戸よ い行き違ひ 前つ戸よ い行き違ひ」は秘かに歩きまわっているさまを表し、同じ場所ではあっても移動の意が含まれている。これはaの用法で考えるだろう。

⑯ 岩の上いわのうへにい懸かかる雲くもの (伊可賀流久毛能) かのまづく人そおたはふいざ寝しめとら 入万三五一八

これは万葉集三四〇九「伊香保ろに天雲い懸き(安麻久母伊都藝) かめまづく人とおたはふいざ寝しめとら」の歌と似ている。いずれも歌の三句以下の意味は不明である。「い懸き」の場合は次々と雲がかかって、と解釈しに分類した。⑯の場合、雲が「懸かる」とあるから、「岩」は岩山と解してよからう。とすれば、「い懸かる」は岩山の上にかかっているの、かなりの広さ、長さを有していると考えられる。aに分類できるのではなからうか。

⑰ 左和多里の手児てりてのこにい行き違ひ (手兒尔伊由伎安比) 赤駒が足掻あしをかき、速み言問はず来ぬ 入万三五四〇

馬に乗って進んでいるその途中で「行き違ひ」った。単にすれ違ひのを「い行き違ひ」といったのではなく、この「行き」には馬に乗ってずっと進んでいる意が含まれている。aに分類できる。

⑱ 皇神相みかみあひの遠御代御代とほみよみよはい布ふしき折り (射布折) 酒、飲みきといふ此の厚朴こうはくは 入万四二〇五

ホホガシワの葉は大きいのでそれを広げるのを「しく」といったらしい。これは移動の距離ではないが、空間的広さに及ぶ動作を表しているのでaに準ずる用法としてaに含めておく。

①⑨ みつみつし 久米の若子^{わかこ}が い触れけむ〔伊触家武 磯の草根の枯れまく惜しも八万四三五〕
勇壮な久米の若者たちが「触れ」たというのは、単にちよつとさわつたというのではなく、大切にしたということではなからうか。だとすれば、時間的継続の意が含まれることになり、りに含められる。

②⑩ 味^{あじ}酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の隣^{となり}に い隠るまで〔伊隠万代〕 道の隈 い積もるまでに

〔伊積流万代〕 つばらにも 見つつ行かむを八万一七〇

この有名な歌は、「奈良の山が幾つもの山の間に隠れるまで、道の曲がり角が幾つも積もるまで何度も見て行こうと思つているのに」という意である。「い積もるまでに」の方は時間的用法と見てりに含めた。「い隠るまで」も三輪山が奈良の山の間に「隠れてしまつまで」と解するなら時間的長さを含んでいることになり、りにできる。

②⑪ 「浦島ノ子ガ」海界^{うみかい}を 過ぎて漕ぎ行くに 海若^{うみわかし}の 神の女^{かみめ}に たまさかに い漕ぎ同ひ〔伊許藝超 相詠^{あひをり}〕 ひ こと成りしかば八万一七四〇

「海の境を越えて漕いで行くと、海神の女にたまたま漕ぎ出会つて」と訳せるが、「漕ぎ出会つて」とは漕いで行くうちに会つて、ということであろう。空間的にも時間的にも継続している意が含まれると考えればりに分類できる。

こうやって一四例中八例は解決できるが、どうにも解決の難しい例がある。

②⑫ ちはや人 宇治の渡りに 渡り瀬に 立てる 杵弓^{きゆきう}檀^{だん} い伐らむと〔伊岐良牟登〕 心は思へど い取らむと〔伊

斗良牟登〕 心は思へど 本辺は君を思ひ出 末辺は 妹を思ひ出 苛^{いら}もなけく そこに思ひ出 愛^{あい}をしけくこ

こに思ひ出 い伐らずそ来る〔伊岐良牟登久流〕 杵弓檀^{きゆきうだん}八記五一

これは日本書紀四三の歌とほとんど同じである。景行天皇が太子だったときに、その太子を倒そうとした大山守皇子が川に落ちて死んだ、その屍を太子が見て歌つたとされる歌である。②でも書紀四三でも、終わりの方に「い伐らずそ来る」とあることから、「い伐らむと」「い取らむと」はウヂノワタリではない所において、「行つて伐つてこよう」と

「行つて取つてこよう」という意味だとすればaに含めることができる。しかし、「い伐らむと」「い取らむと」が、大山守に實際に對しているその場で「殺してしまおう」と思ったのだとすれば「い伐らむと」「い取らむと」に空間的移動の意味はない。この古事記五一の三例と日本書紀四三の三例は今は疑問として残しておく。

②の三例と同じ歌の日本書紀四三の三例の合わせて六例が疑問として残る。これをdとする。

さきに一〇一句のすべてを掲げた箇所で示したaとdは以上のように処理して分類したものである。その分類の結果を以下に示す。

	古事記	日本書紀	万葉集	琴歌譜	合計
a	六	七	四〇	一	五四
b	六	三	二二		三二
c	一	一	八		一〇
d	三	三	〇		六

九〇パーセント以上が空間的、時間的な長さ、広さを含む動詞である。とすれば、イもその空間的、時間的な長さ、広さをより明確に示すことではないだろうか。

では、それはどういうものであるか。動詞に冠する接頭語なので、副詞的な働きを持つものだと仮定すれば、現代語のズットがそれにあたるのではなからうか。「ズット遠くまで」「ズット続ける」のように、ズットは空間的にも時間的にも用いられる。そして「ズット見渡す」のように、「見渡す」全体にズットが及ぶのと同じように、「い掻き渡る」のような場合のイも「掻き」だけにかかるのではなく「掻き渡る」全体にかかることを考えることができる。副詞的用法をもつことは、④にあった「たまさかに」が「漕ぎ」だけでなく「漕ぎ回ひ」全体にかかるように、複合動詞全体にかかることはよくある。

七、イを含む句の音数

次に、このイが「語調を整える」と説明される場合があったので、イを含む句の音数について調べてみた。

	古事記	日本書紀	万葉集	琴歌譜	計
五音	二	三	七		一二
六音	六	一	六		一三
七音	七	八	五二	一	六八
八音	一	二	五		八
計	一六	一四	七〇	一	一〇一

これを見ると、七音の句が多い。六音のことはイをつけて七音にしたという場合があるのかもしれない。しかし、六音や八音の句も全体の二割ある。したがって、このイを「語調を整える」ものと説明する『萬葉集事典』や『日本語文法大辞典』がどういう意味で使っているのかわからないが、少なくとも、一句を五音や七音の決まった音数に整えるためにイを用いたとは言えない。「手児にい行き逢ひ」のように七音で済むところを八音の句にしたものもある。歌の調子ということであれば、歌全体の評価にかかわることなので、筆者にはそれを云々できない。

八、おわりに

イの語源は不明である（注4）。また、仮に、イがズットという意味を表したとして、なぜそれが後世使われなくなったのかも不明である。一般的に、一音の語は不安定である。同様の一音の接頭語、「か易し」「か黒し」などのカ、「さまねし」「さ夜」などのサも明確にとらえられていない（注5）。イが動詞に緊密に結びついた結果、「イ+動詞」が一体化してイが意識されなくなったということは考えられる。そして空間的、時間的長さを表す、より明確なことはとって代わられたということも考えられるが、いずれも推測の域を脱しない。

なお、このイは記紀歌謡にも琴歌譜にもあるし、万葉集の第一期から第四期までその例があることを最後に記しておく。イが歌の調子を整える機能を持っていたとしても、ことはである以上、なんらかの意味があったはずだと考え、今

回は意味に重畳をあてて考えた。

注

- 1 イは単独で使われることがないから正確には「接頭辞」とするべきだが、慣用にしがって「接頭語」としておく。
2 万葉集で除いたものを以下に記す。

歌謡會号

日本古典文学大系の訓み

新編日本古典文学全集の訓み

四五九

移りい行けば〔移伊去者〕

うつろひ行けば〔移去者〕

四六七

去にし吾妹か〔伊去吾妹可〕

い行く我妹か〔同〕

一五二八

い通ふほとに〔伊往通程尔〕

い行き返るに〔伊往還尔〕

一八〇九

い行き集ひ〔射帰集〕

い行き集まり〔同〕

三二六九

光にい往け〔光尔伊往〕

光にいませ〔同〕

四二二七

こ向ひ立ちて〔許牟加比太知言〕

い向かひ立ちて〔伊牟加比太知言〕

- 3 所在を句の形で示しておく。

い組竹〔古事記九二〕 い組竹生ひ〔古事記九二〕

い杵築の宮〔古事記一〇〇〕

い組竹世竹〔日本書紀九七〕

- 4 大野晋先生からは、イの語源は「いく（行）」のイではないか、との御教示をいただいた。「いく」のイが接頭語

となつて更に「行く」に冠するというような現象が他にもあるのか、なお考えなければならぬ。夕詞が接頭語に転化した可能性もある。

- 5 接頭語「さ」についても筆者には私見があるが、それは後日を期したい。